



自治体史の「活用」の具体的手法を考える：『たどる調べる尼崎の歴史』を素材として（〈特集〉自治体史編さんの現在：参加と活用の新しい取り組み）

河野，未央

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:43-55

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489534>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489534>



自治体史の「活用」の具体的手法を考える

―『たどる調べる尼崎の歴史』を素材として―

河野 未央

はじめに

自治体職員の立場から、自治体史の「活用」をどのように働かかけていくのか。尼崎市の場合、『尼崎市史』の「活用」として代表例にあげられるのが、本誌掲載の中村光夫氏の論考と小稿で紹介する「尼崎市史」を読む会（以下、「読む会」）の活動である。「読む会」は平成六年（一九九四）一〇月から現在まで続けられてきた講座である。「読む会」の講師を担当するようになってしばらく経つが、近年、筆者は自治体史の「活用」の〈場〉としての「読む会」のあり方を見つめ直すようになっていた。きっかけは、行論中で紹介する『たどる調べる尼崎の歴史』（二〇一六年、以下、『たどる』）を「読む会」のテキストとしてとりあげたことだった。地域連携協議会では、自治体

史の「活用」手法としての「読む会」について報告したが、『たどる』という独特な自治体史の「活用」について考えをめぐらせていたさなかで、当時は考えが上手くまとまらず、報告も不十分な内容に終わってしまっていた。小稿は、そうした協議会報告について整理し、再構成し直したものである。再構成が成功しているかどうか若干不安が残るが、報告内容から構成も含め大幅に変更・修正していることをご了承いただきたい。

改めて自治体職員の立場において、自治体史の「活用」を考えるにあたり、取り組むべきは以下のようなことだろう。たとえば、自治体史を市民に手にとってもらうには、どうすればよいか。そしてどう働きかけるのか。

結論を先に述べることになるが、第一に必要なことは、自治体史のコンセプト・刊行物としての性格にあわせた具体的な「活用」の〈場〉を想定することである。「活用」に軸をおくと、

自治体史の編さんを終えてからが「スタート」となる。したがって、可能であれば編纂時から「スタート」を切ったあと「活用」のことを視野に入れておくことが肝要である。タイトな編さんスケジュールの場合は難しいとも思われるが、「活用」には、編さん時よりも多くの人を巻き込むための、知恵・工夫が必要になる。自治体史編さんの過程でコーディネーターの役割を果たした（現在、果たしている）自治体職員・研究者の方々には、ぜひともこの「スタート」後について思いを巡らせていただければと思う。

第二の点として、自治体史の「活用」の働きかけにあたり、その対象や方向性を認識しておくことが必要である。たとえば、「活用」においては、さらに歴史を深めていく方向（学問的なステップアップ）を目指すのか。あるいは、自治体史を多くの人に手に取ってもらうために、裾野を広げることを重視するのか。例にあげたこの二つの方向性は、そのいずれをとるかで、それぞれ「活用」のための働きかけ方は異なってくるだろう。

以上から、小稿では、最初に筆者が自治体史の「活用」について見つめ直すきっかけとなった『たどる』について、その刊行物の内容と性格を改めて紹介したい。また、現在自治体史の「活用」の場である「読む会」について、会の進行方法や参加者について紹介する。そのうえで最後に自治体史「活用」の具体的手法について、改めて考えてみたい。

一 『たどる調べる尼崎の歴史』の再検証

（一）『たどる調べる尼崎の歴史』のコンセプト

『たどる』のコンセプト・内容の紹介にあたり、編さんの流れから説明をしておきたい。

市制九〇周年記念刊行物の『図説尼崎の歴史』（二〇〇七年、以下、『図説』）と『たどる』はいずれも新「尼崎市史」編さん事業のなかで刊行された。『図説』は主に事業の前半期に既刊の『尼崎市史』（一九六六～八八年、以下『市史』）の反省をもとにコンセプトが練られた。『市史』は当時の日本史研究の最先端の成果を掲載した重厚な内容だった半面、難しく、親しみにくい（市民誰もが読める内容となっていない）という問題を抱えていた。¹

そのため『図説』は、「誰もが親しみやすく尼崎の通史を学べる印刷物」を目指して編まれた。内容も生活・文化を中心としたもののヘシフトし、読みやすさを重視してテーマごとに見開きで構成、語調も「です・ます」調となった。印刷物として字体（やわらかい印象を受ける丸ゴシックを採用）までこだわったものとなり、刊行当時大きな反響を得て、数年で完売するという快挙も成し遂げた。

『図説』刊行後の事業の後半は、『図説』の反省点をふまえ、

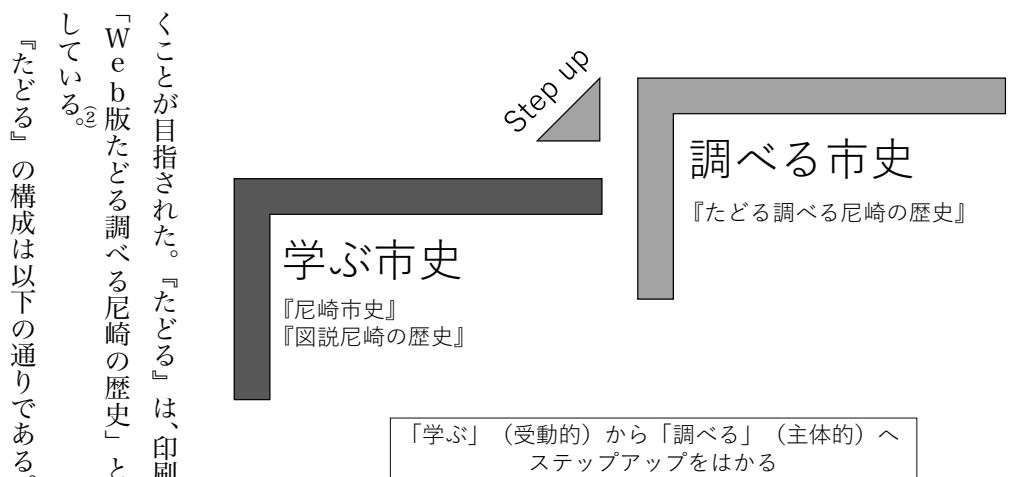


図1

くことが目指された。『たどる』は、印刷物として刊行したのち、Web版たどる調べる尼崎の歴史」としてWeb公開も果たしている。

『たどる』の構成は以下の通りである。

さらなるステップアップが目指された。そうして編さんされたのが『たどる』である。『たどる』の基本コンセプトは、「学ぶ市史から調べる市史へ」（図1）。具体的には、「誰もがみずから地域の歴史を調べ、あきらかにしていくための場づくりを刊行物とWebで」行っている。

第Ⅰ部「歴史資料と文化財でたどる尼崎の歴史」（グラフィックページ）

第Ⅱ部「尼崎市クロニクル——一〇〇年のあゆみ——」（図説形式の年表ページ）

第Ⅲ部「調べる尼崎の歴史」

体裁は、A4判、フルカラー、上下巻計五三八ページと、ボリュームが大きい。市制一〇〇周年の記念刊行物であることから、第Ⅰ部・第Ⅱ部は記念誌としての性格を持たせた内容となっている。しかし刊行物の「目玉」はなんといっても第Ⅲ部であり、頁数も三七〇頁で七割近くを占める。そして「読む会」のテキストこそ、第Ⅲ部の部分である。第Ⅲ部の各章構成は以下のとおりである。

- 第1章「尼崎の地理・地形」
- 第2章「尼崎の古代」
- 第3章「尼崎の中世」
- 第4章「尼崎の近世」
- 第5章「尼崎の近代」
- 第6章「尼崎の現代」

また、各章は「入門編」「史料編」「実践編」の三節で構成されている。「入門編」は、その時代・分野について既刊市史等があまりにしかたしたこと、その到達点について叙述されている。「史料編」では、代表的史料等の紹介と使い方の紹介・説明がなされている。『図説』の、図版等を多く盛り込んだ仕様は引き継がれているほか、旧尼崎市立地域研究史料館（以下、旧史料館）でのレファレンス事例をもとにした史料の使い方など、具体的に例示されている。最後は「実践編」で、各時代・分野についてトピックごとに紹介、既刊の『市史』『図説』で取り上げていないテーマのほか、調査プロジェクトや研究・活用事例等々が紹介されている。

以上の『たどる』の大きな特徴は、読者の想定を大きく転換させたことである。「学ぶ市史」の読者は、歴史像を提示され、与えられる側、やや客体化された受動的な存在である。「調べる市史」の読者は、自ら歴史を探索し、歴史叙述も行うような主体的な存在である。『図説』でも要所で「調べる」ことをうながす記述がみられたが、それを基本コンセプトとして全面に押し出したのが『たどる』であった。

（二）『たどる調べる尼崎の歴史』の評価

上記のような意欲的なコンセプトをもった『たどる』は、刊行後の書評³⁾などをみると、基本的には受け入れられつつも、賛

否両論だった。

評価を受けたのは、概ね『たどる』のコンセプト、取り組み姿勢である。書評以外にも口頭で寄せられた感想を含めると、印象論ではあるが、大学の日本史学など研究室を主宰する研究者からの評価は相対的に高かったように思う。ゼミの演習などで日々学生に伝えている内容が活性化されていることもあって、首肯するところが多いからだろうか。

批判の内容は、バラエティに富んでいて逆に興味深い。物理的に重い、内容が難しい、おもしろくない、歴史学の方法に則した歴史研究を目指しているため市民の多様な関心・歴史へのアプローチを受け止めきれない、ジェンダー視点が希薄だ、などがある。

「おもしろくない」という強烈な批判をいただいたのは、旧史料館時代からのヘビーユーザー、上村武男氏である。「おもしろくない」と述べた理由を、上村氏に改めてうかがったところ、「文章から執筆者の個性が感じられない」とのことだった。執筆者の個性を見出そうと自治体史を読む読者はそもそも稀であろうが、作家である上村氏らしい発言であると思う。しかし、上村氏の指摘をベースに『たどる』の叙述を改めてみると、たしかに切り口やテーマなど執筆者により角度は変わっているが、「異口同音」という表現がぴったりくるほど、歴史学をメインとして、学問上で確立された作法が、ストイックなまでに

繰り返し述べられていることに気づく。上村氏の指摘は、年々精緻さを増している―歴史学はとりわけ顕著なように思われる―「学問」の作法と市民社会との「距離感」を表したもののようにも感じられる。

こうしたなか後述の「読む会」で『たどる』の解説を担当した筆者は、どのような視角から取り上げれば、「読む会」参加者に面白く、興味深く受け止めてもらえるのか悩んだ。講師としての力量がいやでも問われるなか、筆者は、上手いかず苦戦を強いられていた。そうしたなか、「そもそも『たどる』を「読む会」形式でやるのは、ミスマッチではないのか」という自らの力量不足を棚にあげた、なかばなげやりな考えが浮かぶこともしばしばだった。しかし、これが自治体史の「活用」手法を深く考えるきっかけとなったのである。

以上、『たどる』が自治体史の中でもやや特異な性格をもつことを縷々述べてきたが、次に、章を改めて、現在の「読む会」について紹介したい。

二 「尼崎市史」を読む会の紹介

(一) 「尼崎市史」を読む会の進め方

筆者は「読む会」を当時主催していた尼崎市立地域研究史料館（以下、旧史料館。後継の機能を担うのは、筆者が現在勤務

している尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズである。以下、あまがさきアーカイブズ。）の中村光夫氏の退職後、尼崎市立中央図書館で原則毎月第一木曜日に開催していた「読む会」の講師を引き継いだ。当時はまだ『図説』をテキストとしていた。その後、尼崎市立北図書館でも「読む会」開催を計画し、平成二九年（二〇一七）九月から毎月第三金曜日に開催することになった。コロナ禍には休会となったこともあったが、現在、「読む会」の中央図書館例会では『たどる』を、北図書館例会では『図説』をそれぞれテキストとし、いずれも継続中である。ちなみに現役世代・若い世代の参加をうながすために仕事・学校終わりを想定し、平日一八時からとする時間設定は、「読む会」立ち上げ当初より変更がない。開催についての広報は、市報と館内で配布するチラシ、あとはあまがさきアーカイブズの各種SNSで行っている。

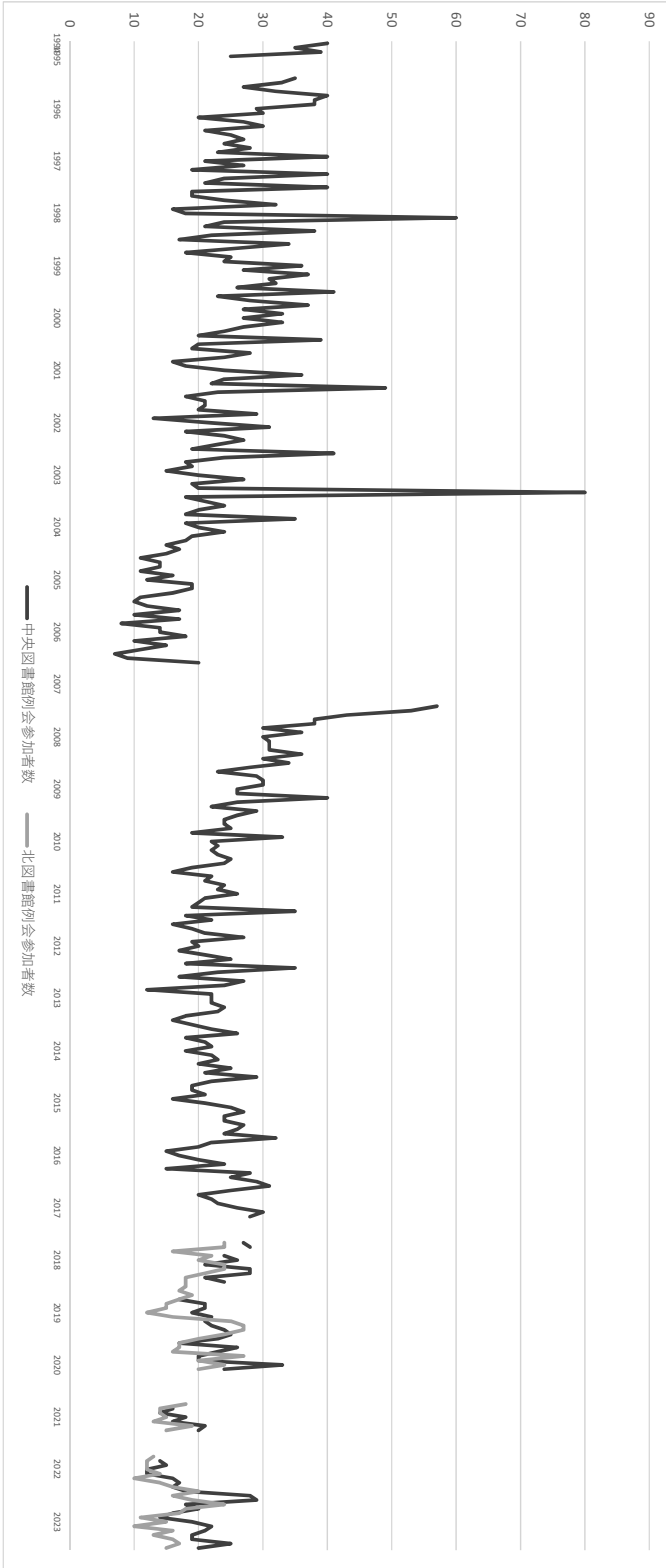
筆者が講師を担当した『図説』・『たどる』は、それぞれトピック（テーマ）ごとに項目立てがされた構成となっている。『図説』の場合はたとえば「近世の村」「百姓の家と家族」などの項目ごとに基本的には見開き二頁で叙述されている。そのため基本的に月例会でとりあげるのは、一回につき一テーマである。内容に関連性が高い場合は、項目のほか、コラムをあわせてとりあげる場合もある。

「読む会」では、参加者への資料として、『図説』『たどる』

の項目の該当部分を複写したものを準備しており、資料代は実費（複写代）を徴収している。『図説』『たどる』など本を持参すれば資料代はかからないが、持参する参加者はほとんどいない。参加者に『図説』『たどる』の購入者はいるので、如上の批判にもあったとおり、持ち運ぶのはやはり重たいのだろう。『読む会』では、『図説』や『たどる』の文章の読み上げを行

う。読み上げは、キリのいいところで区切りながら、適宜パワーポイント等を使用し、ポイントなどを解説する。解説が終れば、また読み上げてその内容を解説する、ということを経り返す。「読む会」の時間は一時間半を設定しているが、近年は概ね一時間強程度の時間で終了している。ただし、『たどる』の場合は、『図説』と比較すると各項目のボリューム（文字数）

グラフ 「尼崎市史」を読む会参加者数推移



が大きいことから、この読み上げと解説のバランスが難しくなる。筆者を悩ませたポイントのひとつである。

解説を終えたあとは、会場から質問を受ける時間を設けている。その場で講師が回答できる内容であれば答えるが、文献・史料などで事実確認が必要な場合は、講師は「宿題」として持ち帰り、調査をしたうえで、翌月の例会の冒頭で紹介している。ただし、コロナ禍では会場からの発言は制限しており、会場全体で参加者の意見や考えを共有できる場はしばらくもてなかった。そのかわり、終了後に個別に講師に質問してもらっていた。ようやく現在質問の時間を設けることができるようになったものの、コロナ以前と比較して内容に関しての質問は、あまり出なくなっている。終了後に個別に質問が寄せられることは続いているものの、「読む会」で解説した内容の質問ではなく、参加者が自ら関心をもって調査をしているテーマについての相談が少なくないため、「出張レファレンス」のようになっていく。

(二)「尼崎市史」を読む会の参加者とその特徴

次に、参加者についてみていこう。グラフは、「読む会」の開始以降の、参加者数全体の推移を表したものである。開始当初よりゲスト講師を招聘したとき、あるいは記念例会などは人数が増加しているが、それ以外は概ね二〇〇〜三〇〇人で推移していることがわかる。中央図書館例会の参加者数は、平均して『尼

崎市史』テキスト期は二四人、『図説』は二五人、『たどる』は二一人である。北図書館例会は一八人となっている。なお、「読む会」は、コロナ禍では定員を半数とし申込み制としていた。「日常」が戻ってきた現在、申込み制は継続しているものの定員はもとに戻したが、参加者数は大きくは回復していない。とりわけ中央図書館例会は、長らく会を支えてきた参加者の高齢化により、人数はゆるやかな減少傾向にある。

新規参加者を増やす働きかけについても考えたが、どのように参加者を増やしていけばよいのか、その分析は十分にできていない。ただ、ひとつあげるとすれば、立ち上げ当初からの平日一八時からという時間設定が、ハードルになっている可能性がある。「夜間で家族が揃う時間なので外出は難しい」「仕事を終えてから参加したいと思っても間に合わない（一八時開始が早すぎる）」などの声が寄せられたことがあったが、こうした声は、引き続き現役世代をターゲットとする場合は重要な指摘で、開催の曜日や時間は大胆に見直す必要があるのかもしれない。

一方で、コロナ禍があり断続的な開催となってしまった現在も参加者してくださる顔ぶれは、中央図書館例会と北図書館例会の両方に参加する熱心な方もいて、一言で言うならば「精鋭」が揃っている。「尼崎郷土史研究会」の会員、あまがさきアカイブズの自主学習グループ「近世尼崎の古文書を楽しむ会」

の会員、「尼崎寺町」のボランティアガイドに所属するガイドの方などだ。近隣市の古文書会などかけもちで参加されている方も少なくなく、歴史文化に関して積極的に関わられている方が多い。ほかに、個人で歴史散策に出かけるなどしているなかで「読む会」にたどりついた、という方もいる。いずれにせよ、上述の『たどる』が想定している市民―自ら歴史を紐解き、調べることができる人々―が大半を占める。「読む会」の終了後、そんな参加者の一人が筆者に声をかけてくださった。「お話を聞くのがね、毎回とても楽しいんです。この会がとても楽しみなんです。」筆者の解説は惨憺たるものなので、参加者が毎回楽しく感じられているのだとすれば、それはその方の「聴く」力の賜物である。こうしたことを考えても、現状の「読む会」は、図1のステップアップをはかる〈場〉ではなく、すでに「調べる」ことができる市民が、新たな知識を獲得するため（Ⅱ次の「調べる」段階に向かうため）の「学び」の〈場〉として機能しているといえる。（図2）参加者数は漸減しているが大幅なダウンでないことを考えれば、現時点で大きく開催方法の見直しを図る必要はないのかもしれない。

しかし、そもそも上述したような「読む会」に新規に参加してもらったことだけが、『たどる』の「活用」なのだろうか。『たどる』を新たに手にとってもらおう市民を増やす、「裾野を広げる」方向で考えることもできないのではないか。改めて自治

体史の「活用」の〈場〉を考えてみたいと思う。

三 改めて自治体史の「活用」の〈場〉を考える

（二）レファレンス・デジタルアーカイブ

『たどる』は、読者に能動的な「調べる人」を想定しているが、

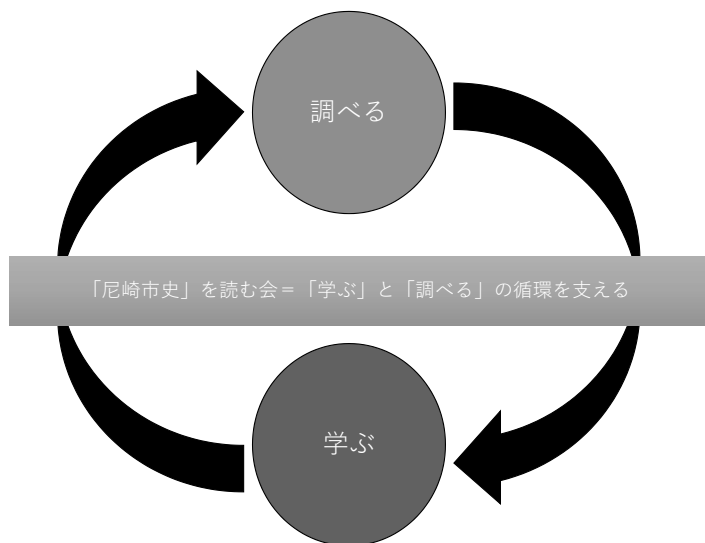


図2

逆にその「調べる人」からみれば、実はこれほど便利な刊行物はない。そして、筆者は実体験として『たどる』がその価値を発揮する場所があることを知っている。あまがさきアーカイブズの閲覧室である。閲覧室のレファレンスで文書群の調査へと誘うガイドブックとして『たどる』がみごとに「はまった」経験は、一度や二度ではない。

Web版『たどる』も、閲覧室と同様に力を発揮する可能性がある。「歴史的公文書」あるいは、「古文書・近現代資料」は、それぞれ目録がWeb公開され、後者は文書群概要もあわせて公開されている。あとは、両者をリンクするような仕組みを工夫し、さらにデジタルアーカイブが構築され、充実していけば、Web版『たどる』も、閲覧室での『たどる』と同様の機能を発揮する可能性がある。

もつとも、閲覧室にせよ、Webにせよ、現状でユーザーが『たどる』の有用性

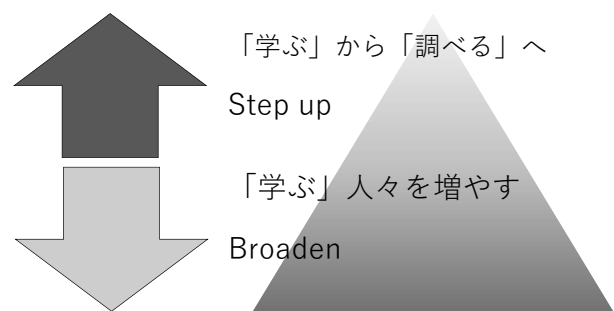


図3

を感じることができ「場」は、現在のところ、いずれも『たどる』が無料で閲覧利用できる「場」である。ちなみに協議会報告では、『たどる』が『図説』の時のように売れていないことを嘆き、その理由をあげてみたが、売れなかったのは、単に刊行物が売れないご時世だということなのかもしれない。『たどる』を販売したい、多くの人に手にとってもらいたいと考えるのであれば、『たどる』が活きる「場」を「見せる（魅せる）」が必要であったと改めて思う。なお多くの人に『たどる』が活きる「場」を「見せる（魅せる）」という、販売の要となる部分は、上述の「裾野を広げる」という考え方と類似の方向性をもつものである。『たどる』には、販売という面でも、「活用」という面でも、新たな「場」の設定が必要である。（図3）では、どのように考えていけばよいか。以下、思いつくままにアイデアを出してみたい。

（二）先行「活用」事例に学ぶ

① 「読む会」の参加者からアイデアを募る・「読む会」の過去に学ぶ

現在の「読む会」は、すでに『たどる』が想定していた「調べる」市民が集う「場」であることは、先述したとおりである。だとすれば、そうした参加者に対して、要

望・アイデアを聞いてみるのもひとつの手だろう。『図説』が市民からの要望を受け止めて編まれていったことを考えれば、「活用」について参加者よりアイデアを募ることをもう一度試してみてもよいのかもしれない。

また、旧史料館時代は、史料に触れる体験、フィールドワーク（まちあるき）、聞き取り調査など、様々な自主企画を立ち上げていた。マンパワー的に難しい側面はもちろんあるが、たとえばかつての「尼崎戦後史聞き取り研究会」などのように、研究者と市民がともにつくりあげる学び、調べる〈場〉を改めて模索することは今後も必要であろう。

② 他自治体事例——主に基礎的な自治体を中心に——

旧史料館の元館長、辻川敦氏から「自治体史の読む会は、全国のいろんな場所で開催されている」と聞いていたこともあって、手始めにインターネットの検索エンジンに「村史を読む会」「町史を読む会」「市史を読む会」などと入力してみたところ多くの事例がヒットした。その多くは自治体ないし教育委員会が企画したもので、自治体史の編さん室主催のもののほか、図書館・公民館活動など社会教育施設によって実施されていた。また、市民の取組として、郷土史研究団体の学習活動、一般的なサークル活動として自治体史を「読む」活動の形跡もみられる。ひとつひとつの活動の具体像を知るところまではいっていない

が、「自治体史は読まない」というまことしやかな言説に対して、「意外に読まれている（読もうとしている、読んでもらおうとしている）」印象を受ける。

開催形式をみると、講師がいる講座形式が多いが、集った面々が一緒に自治体史を紐解き調べていくという対話形式の連続講座も開かれている。⁴これは、図書館をはじめ、最近ではオンライン上を含め民間でも盛んに開催されている「読書会」の手法を彷彿とさせる。自治体史の叙述の時点では知らなかった情報が参加者から寄せられる可能性もあって、『たどる』の「活用」手法として注目できる。住民の手によって編まれる自治体史、大字誌との親和性も感じられ、住民の手による「活用」あるいは編纂事業の「引継ぎ」の第一歩として試してみるのに良いかもしれない。

③ 図書館・公民館等の「活動」から学ぶ

自治体史を「読む」という行為にこだわった場合、図書館、場合によってはその町の書店との協働による企画の立ち上げもひとつの手だろう。本市の図書館で実績があるものとしては、本を紹介するコミュニケーションゲームである「ビブリオ・バトル」もあるし、メディア遊びとして近年注目を浴びている「まわしよみ新聞」の手法なども有効だろう。⁵自治体史をコミュニケーション・ツールとして使用するような〈場〉の設定もあつ

てもよいのではないか。こうした「対話型」の〈場〉を設定するのは、おそらく図書館の司書、あるいは公民館職員であれば熟達している可能性が高いので、相談をすれば自治体史の意外な利用方法を提案してもらえうかもしれない。自治体史の「活用」を、自治体史編さんの関係者だけが担っている、マンパワ―としても限界がある。「輪」の広がりを意識し、異なる〈場〉に柔軟に働きかけてみることは、必要なことではないかと思う。

④ 学校教育への働きかけ

『たどる』を刊行した当初は、学校教育の現場、先生方の利用（教材研究等への活用）を想定し、働きかけも積極的に行っていたが、残念ながら成果としては実を結ばなかった。しかし令和四年度より教育委員会内の他課から歴史博物館へ依頼があり、主に小中学校の社会科教員の研修会を当館で実施することになった。研修会に参加した先生方に昨年は年貢免状や地券といった教科書等でよく知られている史料を実際に手にとってもらう機会を設けたところ、思いがけず好評だった。『たどる』を手にとってもらう次のステップまで誘うことはできなかった。令和五年度は、こうした史料に触れる機会に加え、教材研究のおりには『たどる』を「活用」していただけるような仕掛けを考えたいと思っている。

むすびにかえて

自治体史「活用」について、二つの方向性を想定した。ひとつは、歴史を学び深めていくもので、結果として学問的な研鑽・向上を目指す方向である。もうひとつの目指す方向は、自治体史を市民の暮らし、日常に「溶け込ませる」ことをイメージしている。ふと気になったときに紐解く、そうした本としての位置づけを自治体史が獲得できないか、という試みである。

そのように考えるのは、基本的には自治体史編さんが終了したのち、自治体史の編さん室が解散してしまうという問題が残りに残っていることにある。かつての旧史料館設立の流れのように、自治体史編さん室の後継となる新しい施設を設置することができればよいが、そうでない事例も多々ある。現在編さん中の自治体には、ぜひとも編さん事業の「引継ぎ」をしつかりと考えてほしいと思うが、その一方で、編さん室が解散となるという「ゼロ」に戻る事態へのハードランディングをいかに緩和していくかを考えて、布石を打っていくことも戦略的には必要ではないだろうか。^⑥冒頭で「スタート」を意識すべきと書いたのは、そうした意図もある。もともと、後継施設も、編さん室当時よりは機能縮小・変更のおそれはいくらでもある。筆者個人としては、少子高齢による人口減少社会の到来によって、あ

まがさきアーカイブズも、長期的にはどうなるかわからないことから、様々な戦略を講じる必要があると考えている。上記の事態も決して他人事としてはとらえていない。尼崎市の歴史文化の一翼を長年担い、育ててきた組織として、どう継続、発展していくかは重要な課題である。今回提示した「輪」を広げることは、その戦略のひとつとして考えている。

もともと、自治体職員であれば、異動することと、その自治体の「歴史」から離れることは必ずしもイコールではない。仕事のうえで「歴史のふりかえり」を求められる機会は必ず出てくる。あまがさきアーカイブズへの相談・依頼のありよう——都市計画（まちづくり）、地域振興、観光、人権・文化、学校教育、環境等に関わる様々な部局から相談が舞い込んでくる——を考えれば、その範囲は広い。歴史的公文書を含む歴史資料を提供する場合もあるが、『市史』・『図説』・『たどる』ですでに記されている内容を示すケースもあるので、まずは職員への情報提供、自治体史を紐解く経験ができるような仕組みも必要と感じている。^⑦現在のところ日々の他課へのレファレンスをPR機会としているが、他課の職員を巻き込むような仕掛けをどのようにつくりあげていくか、思いを巡らせる日々である。

このように、筆者もまた職場であるあまがさきアーカイブズもまだまだ「試行」のさなかにある。積み上げた「錯誤」も多くある。今後も引き続き協議会の場などで情報交換を重ねなが

ら、よりよい方向を目指すことができればと考えている。小稿も含め、ご批判・ご叱正を賜れば幸いである。

註

(1) 新「尼崎市史」の編さんにあたってはシンポジウムが開催され、市史のあるべき姿について議論された。は尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』七七号（一九九七）には特集が組まれている。

(2) 『たどる』の編纂については、辻川敦「尼崎市制一〇〇周年記念新「尼崎市史」——『たどる調べる尼崎の歴史』の刊行」（『歴史と神戸』五五―六、二〇一六）、同「尼崎市制一〇〇周年記念『たどる調べる尼崎の歴史』の刊行——尼崎市の市史編集事業の総括として」（『Link』地域・大学・文化・神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター年報）九、二〇一七、以下『Link』、同「尼崎市制一〇〇周年記念新市史について——『たどる調べる尼崎の歴史』」『尼崎の歴史ダイジェスト版』の編さん刊行（『歴史科学』一二二、二〇一八）、松岡弘之「学ぶ市史から調べる市史へ——『たどる調べる尼崎の歴史』をめぐる」（『Link』一〇、二〇一八）などを参照のこと。

(3) 大槻守「『たどる調べる尼崎の歴史』を読む——自治体史編さんの視点から、佐藤大介「地域史を通じた「専門知の民主化」の結晶」（いづれも『Link』九、二〇一七）、岩城卓二ほか「市制一〇〇周年記念の新「尼崎市史」ってどんな本？」、人見佐知子「新市史」を通して考える——自治体史をめぐる歴史実践」、荒武賢一朗「市史のつくり方——深化する尼崎の歴史」、武田壽夫「新市史」をひもとく」（いずれも尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』第一一七号、

二〇一七、以下『地域史研究』、上村武男「自分史と地域史がクロスする場所―尼崎の「新市史」を読みながら」(神戸史学会編『歴史と神戸』五五―六、二〇一六)など

(4) 平成30年度秋田県藤里町公民館講座「藤沢町史」を読む」の案内 <https://www.town.fujisato.akita.jp/upload/download/10461download.pdf> (最終閲覧日:令和五年七月一八日閲覧)。

(5) 陸奥賢『まわしよみ新聞をつくろう!』(創元社、二〇一八)。尼崎市の場合は、自治体史そのものではないが、まわしよみ新聞の手法を用いた「まわしよみ市報」をまずは職員の自主研修の場で実施、その後、市民講座のなかでも実施したが、いずれも好評を得た。もともと市報は歴史資料でもあるので、切り抜いて壁新聞をつくることはできなかったため、コピーやプロジェクターなど代替手段を用い、アレンジして実施した。

(6) 自治体職員の場合は、自治体史編さんを担い、その後職員は異動していくとすれば、その異動先で、自治体史はどう「活用」できるかを考えること。あるいは、「活用」のバトンを渡す相手を作っておくこと。公費を投じて編さんした以上「つくりっぱなしにしない」ことを考えることが必要であろう。

(7) 新規採用者の研修で話す機会はあるが、それだけでは足りていないようにも思う。

〔追記〕令和五年度、尼崎市立歴史博物館は諸事情により公式サイトを閉鎖した。そのため小稿で紹介したWeb版の『図説』『たどる』などデジタルアーカイブコンテンツの一部既存のサービスが利用できない状況にある。突然の閉鎖でご不便をおかけしてしまっていることをこの場を借りてお詫び申し上げたい。一日も早い復旧を目指していきたい。